

として使えるとか、著者バージョンでWordやTechファイルの論文を自分のホームページの上で搭載したり、PDFを同じ研究をしている仲間に送ったりすることは今のサイエンス・ダイレクトの契約上可能ですとか、機関レポリトジに掲載されることも可能ですとか、そういうことの詳しいことが出てます。

これからの可能性として、オープンアクセスがあちこちで言われています。オープンアクセスをどのように考えていますか、と言われることが多いですが、私達はオープンアクセスがヨーロッパでもアメリカでも日本でも真剣に話をされているということはよく解っています。それをすごく真剣に細かく慎重にウォッチしています。どういう所でどういう発言があってどういう動きがあるかという事を見えています。カレン・ハンターがNatureのインタビューで言っていることなのですが、マーケットがオープンアクセスを選ぶということになれば、エルゼビアは商業ベースの出版社として、例えば来年とか再来年とかにオープンアクセスに動くこともできます。ただしマーケットというのがすごく広い概念ですので、日本のマーケットはそうだけど、中国は違うということがありますと、なかなか動けないかもしれません。

私どもが懇意にしている窪田輝蔵さんと言う方、1996年にユージン・ガーフィールドの伝記『科学を計る』という本を書かれた方で、彼が最近ある大学で講演した際に使った文を、本人の許諾を得て使わせていただきます。「これからはいろんなビジネスモデルの競争になるだろう。それぞれのモデルには存在理由があるのだ。どれか一つ最後に勝つということは、ひょっとしたらないかもしれない。オープンアクセスもあるけれど、従来の商業出版のモデルもあるだろう。」彼が言っているビジネスモデルとは、一番目がオープンアクセス、二番目がエルゼビアのような商業ベースのビジネス・データベースというもの、三番目がホームページの上で展開される個人的なジャーナル。窪田さん流の分け方でこう言っていますが、どのビジネスモデルが勝つということはないかもしれない。これから順番に競争になっていくもので、それこそ電子ジャーナルの時代じゃないか。ただ商業主義はいけないというドクトリンを振りかざして競争をなくすというのが、それがいいのか悪いのか。多分窪田さんの言い方ですと、これは間違っているのかもしれない。私もこの意見に同調いたします。

(ふかだ りょうじ)

シンポジウムに参加して

—大きな不安といくつかの期待と—

京都大学大学院農学研究科教授 野田 公 夫

私は農業・農民・農村の近代史を専門にしており、電子ジャーナルもデータベースも利用したことはない。しかしIT化が爆発的に進行するなかで、「知」の発信や蓄積および利用のあり方はどうなっていくのか...半ば図書館協議員という役目から、そして半ば文明論的関心も手伝ってシンポジウムに参加した。想像を遥かに超える深さと広さをも

った革新が進みつつあることはよくわかり、私のこれまでの通念はまさに一変させられた。

今回のシンポジウムでは、専門領域を異にする方々が各々の図書館像を語るという形式がとられた。一つ一つのお話はまことに興味深かったのだが、他方では、過渡期(定まらぬ現在)というものに固有の危うさをみたような気もした。それは、

21世紀に相応しい図書館像（もしくは図書館論）がお一人の口からトータルに語られる時代が近い将来に訪れるかどうかを十分見通せなかったからであり、また、この新たな図書館像（論）がいかなる「力学」の産物として形成されるのかという点に不安を禁じえなかったからである。

かかる「不安」を第一部の内容に即して言えば、「知」の重層性に見合う多元的な「知」の蓄積・発信形態が本当に確保され続けるかという問題である。「知」の発展とは、より高いレベルへの単純な移行や平面的な膨張などではなく、新しい知見がこれまでの「知」に順次重ねられ相互に関連付けられていくことにより果たされるものであろう。このような「知」のありように対応した蓄積・発信形態の「全体」に常時目配りされつつ議論されるのであれば安心もでき、より前向きに討議の輪に加わりうる。しかし、「先端領域」が最新トレンドの普遍性を戦闘的に語り「伝統領域」が自らの特殊性を防衛的に語るという構図では、財政的制約が年々厳しくなる昨今では、“勝負あった”という類の虚脱感すら感じてしまうのである。

もう一つの「不安」を第二部の内容に即して言えば、「知」の独占という恐怖を目の当たりにしたかのような気持ちになったことである。電子ジャーナルに対する独占力の正当性を、エルゼビア・ジャパンの深田良治代表取締役は「学問に国境はない」というパスツールの言葉で表現された。それに対して国立情報学研究所の安達淳教授は、パスツールは先のフレーズに続けて「しかし研究者には祖国がある」とも言っていると反論された。最新の「知」の所有のあり方が、「国境」「祖国」

という前世紀にこそ相応しいと思われるタームを動員して闘わされる...これも大きな衝撃であった。「知」をめぐるパワーポリティクスの深刻さを端的に突きつけられた思いがしたからである。大手製造業やスーパーの破綻に見るごとく、差異化が容易な商品に対する支配力は決して安定的なものではないが、学会誌という厳密に制度化された商品に対する支配を揺らがせることは極めて困難であろう。また、何らかの形でその支配力が発動された場合には極めて深刻な影響力を及ぼそう。最も有力なユーザーである京都大学においてこそ、本格的な議論を望みたいと思った次第である。

もっとも、「不安」だけではなく、若干の「希望」も与えられた。一つは、大学図書館革新のリーダーとして紹介された伊藤義人名古屋大学附属図書館長が、新しい図書館像を「ハイブリッド」という言葉で表現されたことである。もしかするとこの言葉の中に「重層的な知」に対する自覚的な戦略が含まれているのかもしれない、というかなんか期待を抱いたのである。もう一つは、知的空間としての図書館の意義に触れられた佐々木丞平京都大学附属図書館長の言葉である。確かに「館」とは、大きなスペースのこと...新時代の大学に相応しい「知的空間」の問題としても新たな図書館像が語られる必要があるという指摘は「目から鱗」であり、新しい口マンを得たような気がしたのである。しかしその場合、空間性を否定しきったところにこそ意義があるかにみえる電子ジャーナルは、図書館「に」いかなる住み場所を見出すのであろうか？ これもまた、シンポジウムに参加したからこそ得た一つの論点であった。

（のだ きみお）